

# 咬合高径を決める!!

## 第 11 回咬合フォーラムを盛大に開催

2010年11月14日（日）10:00-16:30 於：東京国際フォーラム

無歯顎あるいは咬合崩壊を来した症例で咬合を回復するために必ず解決しなければならない最難題のひとつが、咬合高径をどのように決めるか、というテーマである。本学会が毎年1回開催し、最も特色が出ることで内外から注目されている咬合フォーラムも今回で第11回を迎え（学術委員長・南 清和先生，実行委員長・中山隆司先生），去る11月14日（日），東京有楽町の東京国際フォーラムにおいて掲題によるシンポジウムを開催した。また，座長は本多正明先生（東大阪市）をお迎えし，南 清和先生（大阪市），吉木邦男先生（名古屋市），佐藤貞雄先生（神奈川歯科大学）といういずれも著名な講師陣が，約450名の満員の参加者に向けて，咬合治療における咬合高径の決め方という難題に取り組むための要諦を熱く語り，大いに盛り上がる会となった。



テーマに寄せる関心の高さを窺わせるように，会場は立ち見が出るほどの盛況であった。



南 清和先生

トップバッターは南 清和先生で、「咬合修復治療におけるアンテリアガイドランスと咬合高径を模索する」と題し、重度の咬耗で前歯部審美障害を伴い、アンテリア・ガイドランスの喪失により咬合崩壊に陥った症例の咬合再構成が提示された。咬合崩壊した症例には、顎関節や周囲組織の安定および神経筋機構との調和を図ることなどを目的とした治療咬合を付与することが重要である点などが強調された。



吉木邦男先生

次いで吉木邦男先生は「義歯を含む咬合修復治療において顎頭位と咬合高径を模索する」という題で、咬合高径の変更が必要となる“咬合高径が高すぎる場合”と“低すぎる場合”の決定法について、無歯顎ではセントリック・トレー、有歯顎ではリラクゼーション型スプリントから得られた咬合高径を、プロビジョナルレストレーションを使用して評価し、これを最終補綴に反映させることなどが解説された。

---



佐藤貞雄先生

佐藤貞雄先生は「顎顔面骨格の形態と咬合高径」と題し、咬合高径は歯科臨床における根底をなす主題であり、顎顔面の成長発育と密接な関連性を持ち、咬み合わせの質を左右する最も重要なファクターであるとして、生体が持つ咬合原理を阻害しない対応が重要であるということが強調された。



座長の本多正明先生

今回は、事前に参加者全員に質問用紙を配布したためかたくさんの質問が寄せられ、ディスカッションが会場を巻き込んで予定時間を大幅にオーバーして展開されたこと、さらに今回のような歯科臨床の最も基本的なテーマへの関心がきわめて高いことなどが知られた点は、最近の顕著な傾向として、今後の咬合フォーラムの運営にとっても大きな収穫であったといえよう。

なお、来年の咬合フォーラムは、2011年10月2日(日)に北海道(札幌市・北海道大学学術交流会館)で開催される予定である。

---



実行委員長を務められた中山隆司先生



事前に配布された質問用紙による質疑のほか、会場からも質問が寄せられた。



講師を囲んで、左より、次期理事長・渡辺隆史先生、三輪一雄先生、南 清和先生、理事長・山地良子先生、佐藤貞雄先生、本多正明先生、吉木邦男先生、菅野博康先生、吉木洋二先生、中山隆司先生